

Emergency



Watch

No.52 Apr. 2015



神戸こども初期急病センター

2015年3月受診者数：2051人

【訴え】

- 1. 発熱 : 1168人 (902人)
- 2. 咳嗽 : 861人 (182人)
- 3. 鼻汁 : 647人 (12人)
- 4. 嘔吐 : 498人 (291人)
- 5. 腹痛 : 279人 (102人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

【疾患頻度】

- 1. 急性上気道炎・咽頭炎 : 600人
- 2. 感染性胃腸炎 : 401人
- 3. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 141人
- 4. インフルエンザ : 140人
- 5. クループ性気管支炎 : 87人

神戸こども初期急病センターの3月の総受診者は2051人でインフルエンザはまだでているようですが、年末年始のような流行は去り診療所は比較的落ち着いていました。みなさま、元気に新年度を迎えられることを祈念しています。

今回は感染症の発生を予防するワクチンスケジュールの話を取り上げたいと思います。最近我が国も多くのワクチンが導入され、いつ何を接種すればいいのか混乱されている方も多いと思います。よく受ける質問に、なぜヒブワクチンなどは生後2ヶ月の赤ちゃんの時期から接種するのに、はしか・風しんワクチンは生後1歳を超えてからなのかということがあります。

いくつか理由がありますが、回答のひとつに適切な免疫獲得が期待できる時期に接種するというのがあります。ワクチンは、感染症の原因となる病原体を、病気を起こさない程度に性質を変えたものや病原体の成分のものなどその作られ方から区別できます。生きた病原体自身を弱めたものを接種して免疫をつくる「生ワクチン」、免疫をつくるのに必要な成分のみを病原体から取り出し毒性をなくしたものを接種して免疫をつくる「不活化ワクチン」です。みなさまご存知のように赤ちゃんは出生からしばらくの間はお母さんから胎盤を通じてもらう免疫があります(移行抗体といいます)。移行抗体があると病原体が体に入っても守ってくれて好ましいことではあります。しかし、この移行抗体がある時期に生きた病原体自身の生ワクチンを接種しても移行抗体がワクチンを攻撃してしまいうまく免疫が付きません。そこで確実にこの抗体が消失する1歳を超えてから接種がはじまります。その一方、病原体の成分のみで作られた不活化ワクチンはこの移行抗体の影響を受けませんので、赤ちゃんの時期から接種できます。では、飲むワクチンとはいいますがたとえば生ワクチンでも移行抗体の影響をほぼ受けませんので、生後早期から接種できます。このように不活化ワクチンであるヒブワクチン・肺炎球菌ワクチンや生ワクチンであるが飲むワクチンであるロタウイルスワクチンは生後早期の2ヶ月の赤ちゃんから接種でき、注射の生ワクチンであるはしか・風しんワクチンや水痘ワクチンは1歳を過ぎてから接種をするようにスケジュールが組まれています。

適切な免疫獲得が期待できる ワクチン接種時期の考え方

・ワクチンが母親からの移行抗体の影響を受けるのは??

